

デカセギと家族⁽¹⁾

—— 日本で育った子どもの日本への帰還・K 一家の場合 ——

樋 口 直 人 (徳島大学総合科学部)

稲 葉 奈々子 (茨城大学人文学部)

1. 問題の所在

南米から日本へのデカセギをめぐる、量的にもっとも多く⁽¹⁾の論考が出されているのは、教育の領域である⁽¹⁾。そこでは、「学校の対応」「学校での適応」「不就学」「進学」「子どものアイデンティティ」などがトピックとなるが、「日本の学校」という制度的文脈に拘束されすぎていると筆者は思っている。確かに日本の学校制度は子どもの教育を規定する大きな要因だが、教育達成がそれだけで規定されるわけではないことは、教育を専門とする当の研究者たちによって数多く指摘されてきた。その一つとして、家庭を初めとする学校外の社会環境がある。社会学者としてデカセギと子どもの問題にアプローチするとき、こうした社会環境はもっとも重要な変数である。本稿において、沖縄系移民でアルゼンチンから渡日した K 一家の事例を取り上げるのも、社会環境の相違が帰国を決意させる要因となり、なおかつ子どもの適応を規定してきたからである。

さらに、K 一家で子どもが適応せねばならなかったのは、アルゼンチンに帰国してからのことであった。ブラジルからのデカセギの研究では、日本からブラジルに渡った際の子どもの適応に関する議論も散見されるものの、適応の文脈を比較の土壌で論じるような観点からではない。南米→日本だろうが日本→南米だろうが、発達途上にある子どもは移動に伴う適応に苦労する。しかし、その困難の背後にあるサポート体制の相違は、労苦を報われるものにするか否かを決定するといってもよい。本稿で試みるのは、子どもを取り巻く社会環境の相違から移動に伴う適応の違いを描き出すこと、並びに

適応という用具的な側面を超えて移動が持つ含意を考察することにある⁽²⁾。

2. K 一家について

K 一家は、沖縄系移民のほとんどがそうであるように、アルゼンチンでクリーニング店を営んでいた。このうち夫は、沖縄で生まれてすぐにボリビアのコロニア・オキナワに移民し、十代でアルゼンチンに転住し、アルゼンチンの中学を中退した。そのため一世ではあるものの、日本で教育を受けたわけではない。コロニア・オキナワでは日本語教育が行われていたため、日本語は母語水準ではないもののかなりできる。ボリビアで教育を受けているためスペイン語もできるが、琉球語が一番使っていて楽だという。なお、コロニア・オキナワ出身であることは、日本で夫が電設業で働くに際して必要な社会関係資本となっている（樋口 2010c）。

妻は、アルゼンチン生まれの沖縄系二世であり、中学を中退して十代で結婚した。渡日までは日本語ができず、日本に行くことが決まってから勉強し始めている。2 人の間には一人っ子の長男がおり、アルゼンチン生まれだが日本で育ったため日本語が第一言語である。夫が日本国籍であるため長男は二重国籍で、妻はアルゼンチン国籍だったが日本在住中に日本国籍を取得して二重国籍となった。そのため、妻が渡日して何年かはアルゼンチン国籍で外国人登録していたが、その後は全員が日本国籍で滞在していたため、外国人登録の統計には現れない家族となった。

一家に対する聞き取りは、まず夫に対して2008年9月1日にアルゼンチンで行った⁽³⁾。それから同9月5日に自宅で妻と夫に再度聞き取りし、同11月1日に日本で長男にもインタビューを実施した。そのほか、友人や親族など周辺的な情報を提供する人たちにも聞き取りしているが、それらについては必要な限りで注でふれることとする⁽⁴⁾。

3. 一家の日本滞在

K 一家では、1984年に結婚してすぐに長男が生まれ、87年に夫がデカセギのため日本に渡った。結婚してから妻の父親に借金して住宅兼店舗を購入したため、負債を返済する必要があったからである。当初は、夫の単身で2年間という予定のデカセギだったが、残された妻と長男がさびしくなったため7ヵ月後の88年に夫に合流し、デカセギ期間が長くなっても家族で過ごすことを優先させた。そのため、一家の滞在は96年まで長引くこととなったが、その間に帰国は自明の前提から話し合いによって選択するものへと変化していく。

夫は当初、アルゼンチンの旅行社から藤沢市湘南台での仕事を斡旋され、妻子を呼び寄せた際の生活拠点も当初は湘南台にあった。夫は最初の半年間はいすゞ自動車の下請けで働き、派遣会社内で配置転換され近くの電機工場に2年間派遣された。妻も子どもを保育園に預け、夫と同じ工場で2年間パートとして9～17時まで働いている。湘南台のアルゼンチン系派遣会社へと斡旋され、湘南台の工場で働き、妻もパートでデカセギ者の多く集まる工場で勤務する⁽⁵⁾。これは、アルゼンチンからデカセギに出た人たちのもっとも典型的な包摂パターンといえる。

だが、それからK 一家はもう一方の典型的な包摂パターンたる電設工業へ、常とは異なる形で包摂されていった。1990年、夫はもっと稼げる仕事として電気工事の職を義兄に紹介され、一家は湘南台を離れた。義兄に最初紹介されたのは鶴見の大手電設業者だったが、鶴見で一家が住める家を見つけられなかった。何軒も不動産業者をまわって探したものの、沖縄の人は夜中に三線を弾いたりするので貸せないと、夫の苗字（沖縄系とすぐにわかる姓）を聞いただけで断られてしまう⁽⁶⁾。そのため、埼玉県にある南米系ではない電設会社を紹介され、そこで働くようになった。この会社には当初はアルゼンチン系の従業員もいたが、帰国したりやめたりしてアルゼンチン系は夫のみとなる。

湘南台にいたときには子どもの学校など必要な手続きを派遣会社がしてい

たが、埼玉ではすべて自力でしなければならないため、妻は辞書を買うなどして日本語を読むようにし、1年間仕事を休んだ（その後、帰化手続きも自力でしている）。それから長男の同級生の母親に誘われ、化粧品の試供品をパック詰めするパートを帰国するまで続けている⁽⁷⁾。この仕事は、工場ではなく民家で主婦4人が働く形態のもので、同僚の日本人主婦と仲良くなって彼女たちが日本での主たる相談相手となった。夫の電設会社も、日曜日にも工場の電気設備の点検のような細かい仕事が入って収入もよく、人間関係も良好で社員旅行であちこちに行くようなところだった。

長男は、喘息があったため医師の勧めでスイミングに通うとともに、算数が苦手なので親の意向で学習塾にも通っていた。学校では、外国人が少ない地域でアルゼンチン名を用いていたため、全学で知らぬものがないくらい有名だったというが、小さいじめを除けば問題もなかったという。

夫は日本人企業での仕事に忙しく、妻は日本人パートのなかで働き、子どもは同級生の半数以下しか通わない塾にも通う。こうした側面をみる限り、K一家は派遣会社が用意する生活基盤も親族ネットワークも利用せず、その地域におけるごく一般的な核家族として包摂されていったようにみえる⁽⁸⁾。夫は、こうした日本での仕事も生活も気に入っており、妻の希望がなければずっと日本にいたいと考えていたが、結果的には妻の強い希望があって夫はそれに従うこととなる。一家は、子どもが小学校を卒業するのを区切りとしてアルゼンチンに戻るが、その理由は以下の2つによっている。

第1に、日本には頼れる家族・親族がいない。もっとも、家族・親族がデカセギしなかったというわけではない。K一家の親族が属する同郷会の人たちは、日本へのデカセギが盛んなグループの1つで、90年前後には同じ出身の一世の男性50人が全員デカセギに出ていたという⁽⁹⁾。しかし、ほぼ全員が短期間でアルゼンチンに戻ったため、日本へ親族構造が持ち込まれるようなことはなっていない。わずかに残る親族や友人は鶴見や湘南台にいたため、年に数回程度しか会うこともなかった⁽¹⁰⁾。そのため、日常生活のレベルではアルゼンチンから持ち込んだ社会関係とは遮断された生活を送っており、もし日本に定住したとして夫妻に何かあれば長男は孤独になってしま

う。日本で育った長男は、近しい親族がいないのが当たり前の生活だったが、近しい人たちに囲まれた環境を経験してほしくて帰国すべきと思ったという。

第2に、子どもを大学に進学させたいが、日本で大学進学するのは難しいのではないかと、という懸念がある。夫の仕事の同僚も、日本で大学に入るのは難しいというし、それならばアルゼンチンで大学に通ったほうがよい。中学校に入ると帰るのは難しくなるし、大学にも入れなくなる。それで小学校卒業を区切りとしてアルゼンチンに戻ることを選択したのである。

4. 帰国後の生計

滞日中、K一家は長男が小学校6年の夏休みに帰国の準備として「お試し帰省」をするまでは、アルゼンチンに帰省していない。夫婦が持っていたクリーニング店も閉めており、アルゼンチンとの接点はあまりなかった。アルゼンチンに戻ってから、もうクリーニングは斜陽産業だから再開しても仕方ないと周囲にいわれ、デカセギから戻った知り合いが営んでいたのと同じような工具店を始めた。9年間の滞在中に一家がした貯蓄は10万ドルくらいで、子どもを習い事に通わせ妻がパートしかしていないにしては多い部類に入る。これは、夫が日本に住みたいと思っていたのに対し、妻がいつかアルゼンチンに戻るつもりで人付き合いも最小限にして出費を抑えたことによる。

いずれにせよ、早期のうちは妻の父に夫妻を返済するため頻繁に送金し、それ以降は将来のために貯蓄しておいた。アルゼンチンに戻ってから、クリーニング店の設備などを始末し、工具店を始めるのに必要な投資を賄うこともできている⁽¹²⁾。ブエノスアイレス市の中心から5キロ程度離れたところではあるが、大通りの角地で立地が良いため店の売り上げで生活できるし、筆者が訪問したときには住宅部分も綺麗に改築されていた。その意味でK一家は、デカセギからの帰還者のなかでは持続的な生計の途を確立し、生活状況が良い部類に入る。

5. 帰国後の長男の状況と長男の再渡日

(1) アルゼンチンでの適応

このように一定額の貯蓄を持ち帰り、工具店も好調であることは、子どもの教育に対して投資する余裕を生み出す。そのため、アルゼンチンから戻ってから1週間後に、長男はアルゼンチン唯一の日系学校である日亜学院の中等部に入学した。日亜学院の学費は年間数千ドル（フルタイム最低賃金での年収相当）かかることから、生活にある程度の余裕がある層でないと行かせられない。

だが、長男自身は望んでアルゼンチンに来たわけではない。小学校が終わったらアルゼンチンに帰ると母親に言われており、4年生の頃から日本を離れる不安感を抱いていたが、スペイン語は小学校3年生のときに母親から習ってすぐ挫折した。4歳で渡日したため、子どものときに使っていたスペイン語を完全に忘れてしまい、アルゼンチンに戻ってゼロからスペイン語を再習得しなければならなかった。

そのため、午前中は日亜学院でスペイン語の授業を受け、午後には2年間毎日スペイン語の個人レッスンに通った。スペイン語を教えたのは、母親の妹2人と英語を教えている従姉妹で、最初の2年は遊ぶ時間もなく「勉強だけ」という状況だった。半年後には、家の中でもスペイン語しか話してはいけないと親に言われ、会話も少なくなったという。それでも、夏休みに追試を受けて何とか単位がとれるような状況で、3年目にならないと学校の授業についていけるようにならなかった。後に弁論大会に出場した際、当時の苦しい状況を長男は以下のように振り返っている⁽¹²⁾。

三年前のことです。「アルゼンチンと日本とどちらがいいのかな？」と家族にきかれました。そのときどうしてか「どっちでもいいさ」と答えてしまったのです。本当はすぐにでも日本に帰りたいかったけれど、両親に心配をかけたくなかったため、無理にでも元気なふりをしていたのです。両親はそんな自分を気づかってボーリングやデパートによく連れていってく

れました。しかし、そんな両親の心が痛いほどわかって、日本へ帰りたい気持ちは決して変わりませんでした。そんな日々が続く中、とうとう恐れていたアルゼンチンの学校へ行く日が来てしまいました。これはスペイン語がわからない自分にとって最悪でした。自分の回りには訳のわからない言葉が耳に響き、頭の痛くなる日々が続きました。毎朝早く起こされ、学校で理解のできない授業を受け、そして家に帰る。そんな退屈で苦痛な毎日が続きました。今から思えば今までの人生で一番不幸な日々であったと思います。身体もこわし、学校も休み、食べ物も満足に食べられない、そんな自分が本当にいやになりました。頭の中では、早くアルゼンチンになれないといけない…と想着いても、身体も頭もついていけません。これ以上頑張る意欲がどうしても沸いてこなかったのです。

アルゼンチンでの生活になじめず、日本に戻りたいと想着いたのは長男だけではない。夫も最初の2年間はアルゼンチンの生活に不満たらたらで、日本に戻ることを想着いた。が、上記のような長男の苦しみを知って自分こそアルゼンチンでの生活を前向きに考えるべき、と頭を切り替えたという。長男は、アルゼンチンに戻って「何回もキレた」といい、父親とよく衝突した。思春期だったことと適応で苦しんだことが重なり、父親とはほとんど口をきくこともなく、20歳になってそれまでの思いのたけをぶちまけてから、ようやく関係は正常化したという。

ただし、ある程度の年齢になって渡日した子どもに比べると、アルゼンチン側で長男をサポートする体制は格段に手厚い。稲葉・樋口（2009）では小学校5年生の年齢で渡日したF一家の長男の経験を紹介しているが、日本語学習をサポートしたのは日本語のできない両親ではなく、学校の国際学級だった。樋口・稲葉（2010b）でみたI一家の長男の場合、日本に長く住むという意識なく学校に通っており、両親もサポートする日本語力がなかったため、結局日本語学習に挫折している。K一家の長男の場合、日亜学院に彼と類似した境遇の子どもがいたこと、日系の学校であることに加え、親族のもとでスペイン語を毎日学習する体制が敷かれていた点で、日本側に編入し

た場合とは異なる。

このような、家族・親族・移民コミュニティ内部でのサポート体制＝社会関係資本が、子どもの教育達成に影響を及ぼすという結論が、近年のポルテスらの調査から出されている（Portes and Rumbaut 2001；Rumbaut and Portes 2001）。上記のように、長男は確かにアルゼンチンでの適応に際して苦しんだ。しかし、私立学校に入学してデカセギ帰りの家族を受け入れる体制を整えた環境で教育を受け、家族・親族による充実した学習支援を受けられた点で、前段のF一家やI一家の子どもとは異なる。そもそも、F一家やI一家の親は日本語も十分にできないため、子どもの日本語適応を親が助けることもできない。学校以外に子どもをサポートする体制はないのである。

ただし、サポートが十分になされたとしても、十代になってからアルゼンチンに戻った者の場合、スペイン語はあくまで第二言語としてしか身につかない。K一家の長男にしても、日亜学院に入学して3年目からは授業で苦労しない程度までスペイン語が身についたが、娯楽のために何かを読む場合にはスペイン語を見る気にはならず、日本語になるという。現在では母親とはスペイン語で、父親は日本語と琉球語とスペイン語を混ぜて話すのに長男はスペイン語で答えるようになったが、スペイン語はあくまで道具的に用いるコミュニケーション手段である。

こうした経験は長男だけのものではなく、日本で一定年齢まで育った者同士で日本語を話したいという希望を持つ若者が、ミクシィを介してグループを形成することもある（樋口 2008；樋口・稲葉 2009a）。長男もミクシィを使っていたが、それよりは学校で同様の境遇にある仲間と交際していた。こうしたつながりは、長男の再度の渡日にも影響を与えたと思われる。

（2）大学進学と日本への再渡航

日亜学院を卒業した長男は、ブエノスアイレスで大学に入学し心理学を専攻した。そこで3年間臨床心理学を中心に学んだが、深刻な悩みを抱えた人ばかりが相談室に来るなかで、カウンセリングは面白いが精神的に重荷だった。仕事だと割り切れる人でないとカウンセラーにはなれず、感情移入した

ら自分の神経がもたないと思うと、続けていけなかったという⁽¹³⁾。

それで大学をやめ、次なる希望である獣医学部に入る前に学費を稼ぎ、本当に獣医になりたいのか自分を見つめ直すため、2008年に今度は単身で2年間の予定で渡日している。両親は学費が必要ならば援助するといったが、自分で払うと主張して渡日を選択した。このときは、鶴見に住む叔父(夫の弟)に渡航費を借りて叔父を頼り、その紹介で派遣会社の仕事についた。工場で働きながらラインの通訳もしているが、渡航費も返済したので工場をやめて、自分の成長に役立つような仕事を探すという。スペイン語を教えるような仕事がいいというが、聞き取り時点で確かなあてがあったわけではない。

また、もともと日本に一度行きたいと思っていたというが、日本で進学や恒常的な就職を考えてのことではない。日亜学院の同級生たちは、日本に留学したり、アルゼンチンでは何をするわけでもなく日本に戻ることはばかり考えていたりする者もあり、実際に長男が日本で会っているのはそうした境遇にある5人組である⁽¹⁴⁾。それぞれ神奈川や千葉にばらばらに住んでいるため、2週間に1度新宿などで会うという。

学費を稼がねばならないのに、工場での仕事をやめてやりがいのある仕事を求める。新たに社会関係を作らず日亜学院の同級生と遊ぶ。——長男にとっての日本行きは、自らいう自分探しに加えて、アルゼンチンで過ごした12年間の休息をとるような意味合いが強いように見える。12歳でアルゼンチンに戻ってから、スペイン語の世界に放り込まれて否応なく習得し、大学3年が終わるまで駆け足で来た。心理学が合わないと思ったとき、では自分はいったい何をしたいのか——そんな風に思ったとしても不思議ではない。

6. 結語にかえて

これまでみてきたように、K一家はデカセギの目的を達成し、長男の学校での適応にも成功したといってよい。実質8年間の家族滞在で、店舗兼住宅の購入資金を返済し、将来性のないクリーニング店に代る新たな店の開業資金まで貯蓄できた。妻はパート主婦化するという日本的な包摂のもとであっ

でも、子どもへの習い事に対する投資と貯蓄を両立させている。その意味で、一家は将来を見据えて上手に家計をやりくりしてきたといえるだろう。

長男は、2年間で学校の授業についていける程度までスペイン語を猛勉強し、その過程でいろいろと困難があったことは前節で見たとおりである。だが、デカセギ後に貯蓄がなくて私立学校に行けない子どももいるなかで、中学5年間ずっと日亜学院に通うだけの家計の余裕があった。それに加えて、親族が毎日勉強を教えるという支えがあればこそ、速やかに学校に適應できたのだといえる。

日本では、非正規雇用のもとでも子どもの塾や習い事に出費を惜しまない、教育熱心な南米系移民の両親は多い。そうしたミドルクラスの志向性は、高額な学費を徴収するブラジル・ペルー人学校を支える源泉となっており、教育への投資意欲の高さゆえと考えなければこうした学校の成立は説明できない。だが、現実には日本語が支配する世界のなかで、家族・親族による学習支援が不可能な状態で学校に包摂される南米系移民の子どもは多い。それに比べると、南米でのサポート体制は「ホーム」であるだけにはるかに手厚い。日本で南米の子どもの教育問題が語られるとき、日本と南米のサポート体制の相違が適應状況を規定することに、もっと目を向けるべきだろう。

ただし、その後の長男の軌跡は成功した適應をもって終わる物語ではすまなかった。トランスナショナリズムの研究が進展するにつれて、単に一世が移民先で「ホーム」との紐帯を維持するのみならず、二世によるトランスナショナリズムの実践もテーマ化している (Levitt and Waters 2002)。だが、そこで描かれる二世のトランスナショナリズムとは、定期的な親族訪問の度合いとその主観的意味づけといった程度でしかなく、実存的な切迫感を伴うものではない。

長男の場合、1.5世として4歳の時に渡日して12歳まで過ごし、それからアルゼンチンに戻っている。これは、両親にとっては「ホーム」に戻るものであっても、彼にとってそうだったとは必ずしもいえない。トランスナショナリズムを定量的に把握しようとする、長男はアルゼンチンに戻ったところで研究対象から外れてしまう。しかし、1.5世たる長男にとって「ホーム」

はどこなのか、あるいは「ホーム」という概念で捉えること自体が適切なのか⁽¹⁵⁾。その後の長男の渡日は、計画通りならば2年間の貯蓄と休暇のための旅のようなものとして位置づけられるだろう。

しかし、母親が「人生何が起こるかかわからない、日本で彼女ができるかもしれないし」という以上に、不動産の「ホーム」がない長男の日本行きは不確定要素をはらむものである。こうした若者たちと「ホーム」というテーマについては、稿を改めて複数人の事例を取り上げて分析していきたい⁽¹⁶⁾。

-
- (1) 単行本になったものだけでも以下がある（拝野 2010；児島 2006；宮島・太田 2005；森田 2007；小内 2003, 2009；太田 1999；佐久間 2006；関口 2003；新海ほか 2001；志水・清水 2001）。
 - (2) こうした視点は樋口（2009）で出しており、K 一家の長男にも言及してある。本稿はそれを詳細に論じたものである。
 - (3) このときには、併せて夫の兄や従兄弟、妻の伯母や従姉妹にも聞き取りを行っている。
 - (4) 本稿は、筆者らが2005年から現在まで継続中の、アルゼンチンから日本へのデカセギ調査の一環である。その成果としては、樋口（2005, 2007, 2008, 2009a, 2009b, 2010a, 2010b, 2010c, 2010d）、樋口・稲葉（2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2009c, 2010a, 2010b, 2010c）、稲葉・樋口（2008, 2009, 2010a, 2010b, 2010c）を参照。
 - (5) この工場には、夫のような派遣会社経由で働く男性の他に、妻のようなパート女性が数多く働いていた。この工場については、他の女性もしばしば聞き取りに際して勤務先として言及していたが、子どもの状況に合わせて勤務時間の調整や早退がしやすい職場だったがゆえに、南米系女性をひきつけたからだという。
 - (6) この時期に電設業者で働いていた南米系移民の多くは、コロニア・オキナワ出身者ないしその親族だったが、男性単身が多かったため会社の寮に住んでおり住宅問題は顕在化していない。
 - (7) この仕事は9～16時の勤務だったが、それ以外にも内職として仕事を持ち帰れたので、自宅で手が空いたときにも仕事できてよかったという。
 - (8) もっとも、住んでいたアパートは古くて両隣が空室となっており、他の居住者も単身男性が多かったため、近所づきあいはできなかった。妻のパートの同

僚やPTA役員をしていたときの母親仲間、父親の同僚といった形で、地元のネットワークは杜縁が中心となっていた。

- (9) 妻の従弟に対する聞き取りによる（2008年9月5日）。
- (10) 沖縄に残っている伯父の家にも2度訪問しているが、このような日本にいる親族訪問も沖縄系の人たちの間では珍しくない。
- (11) ほとんどの日系クリーニング店で用いている旧式の設備では、売却しても二束三文にしかない。一家は何もない店舗をゼロから改装する費用も出さねばならなかった。
- (12) 論集からの引用。
- (13) 長男は、大学に通っている間のアルバイトとして日本語教師をしていた。日本語教師の報酬は高いものではなく、生計を維持するならば他の仕事のほうが割は良いが、日本語を教える仕事は面白く、やりがいがあったという。
- (14) そのうち2人は日本で育ちスペイン語が苦手な者、あと2人はアルゼンチン育ちだが家の中では日本語を使っていた者である（2人の友人への聞き取りデータも参考にしている、2008年12月4日、8日）。
- (15) その点で、日本で生まれて13歳で両親と共にアルゼンチンに渡った、長男と同年齢の友人とは異なる。この友人の場合、両親が一世ということもあって「日本で生まれた日本人」という意識が強く、彼にとってアルゼンチン行きはまったくの外国行きだった。そのため、日亜学院でも授業についていけず中退し、夜間の中学校に通って卒業するが、新聞を理解できる水準までスペイン語は上達せず、卒業しても無為の日々が続いていた。彼にとって動かぬ「ホーム」は日本であり、結局日本に戻って親が残した人材派遣業を続ける道を選択している。
- (16) そうした若者の事例については、さしあたり樋口（2008, 2009b）、樋口・稲葉（2008a, 2009a, 2010b）、稲葉・樋口（2009）で取り上げている。

文献

- 拝野寿美子, 2010, 『ブラジル人学校の子どもたち——「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版.
- 樋口直人, 2005, 「アルゼンチンの日系クリーニング店とデカセギ」『Migrant's ネット』83号.
- , 2007, 「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant's ネット』105号.

- , 2008, 「ミクシィでつながる南米日系の若者たち —— 狭間におかれた若者たちの可能性」『Migrant's ネット』115号.
- , 2009a, 「日系人の大量失業 —— 『もうひとつの派遣切り』の教訓」『DEAR News』138号.
- , 2009b, 「南米日系人のデカセギと子どもの教育 —— 地球の両側から考える」『Migrant's ネット』124号.
- , 2010a, 「滞日経験を生かす外国人労働者」『東アジアへの視点』21巻1号.
- , 2010b, 「経済危機と在日日系南米人 —— 何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622号.
- , 2010c, 「都市エスニシティ研究の再構築に向けて —— 都市社会学者は何を見ないできたのか」『年報社会学論集』23号.
- , 2010d, 「あなたも当事者である —— 再帰的当事者論の方へ」好井裕明・宮内洋編『＜当事者＞をめぐる社会学 —— 調査での出会いを通して』北大路書房.
- ・稲葉奈々子, 2008a, 「デカセギと家族⁽¹⁾ —— 日本就労の意図せざる結果・A 家の場合」『徳島大学社会科学研究』21号.
- , 2008b, 「デカセギと家族⁽³⁾ —— 完全な定住と事実上の定住の間・C 家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号.
- , 2009a, 「デカセギと家族⁽⁴⁾ —— 日本で育った子どもが帰ってから・D 一家の場合」『徳島大学社会科学研究』22号.
- , 2009b, 「デカセギと家族⁽⁵⁾ —— 一家離散と再結合の過程・E 一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
- , 2009c, 「アルゼンチンからデカセギ研究・序説 —— デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨城大学地域総合研究所年報』42号.
- , 2010a, 「デカセギと家族⁽⁸⁾ —— 兄弟の成功物語・H 一家の場合」『徳島大学社会科学研究』23号.
- , 2010b, 「デカセギと家族⁽⁹⁾ —— ライフコース上のそれぞれの帰結・I 一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』43号.
- , 2010c, 「移民自営業者によるニッチ形成と産業構造 —— 横浜市鶴見区における南米系電設業者の進出を事例として」『村田学術振興財団2010年報告書』村田学術振興財団.
- 稲葉奈々子・樋口直人, 2008, 「デカセギと家族⁽²⁾ —— 農園維持の世帯戦略・B 家の場合」『茨城大学人文学部紀要 (社会科学科論集)』46号.

- , 2009, 「デカセギと家族(6)—— ミドルクラスのハビトゥスと周縁的労働力という現実の間・F一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』 7号.
- , 2010a, 「デカセギと家族(7)—— 独立への2つの道・G一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』 8号.
- , 2010b, 「デカセギと家族(10)—— ポスト花卉栽培の生業をめぐる苦悩・J一家の場合」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』 9号.
- , 2010c, 『日系人労働者は非正規就労からいかにして脱出できるのか—— その条件と帰結に関する研究』全労済協会委託研究報告書.
- 児島明, 2006, 『ニューカマーの子どもと学校文化』勁草書房.
- Levitt, P. and M. C. Waters, 2002, *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russel Sage Foundation.
- 宮島喬・太田晴雄, 2005, 『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版会.
- 森田京子, 2007, 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティクス—— ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社.
- 小内透編, 2003, 『在日ブラジル人の教育と保育—— 群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店.
- 編, 2009, 『在日ブラジル人の教育と保育の変容』御茶の水書房.
- 太田晴雄, 1999, 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- Portes, A. and R. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press.
- Rumbaut, R. G. and A. Portes eds., 2001, *Ethnicities: Children of Immigrants in America*, Berkeley: University of California Press.
- 佐久間孝正, 2006, 『外国人の子どもの不就学』勁草書房.
- 関口知子, 2003, 『在日日系ブラジル人の子どもたち—— 異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店.
- 新海英行ほか編, 2001, 『在日外国人の教育保障—— 愛知のブラジル人を中心に』大学教育出版.
- 志水宏吉・清水睦美編, 2001, 『ニューカマーと教育—— 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店.

(付記) 本稿のもととなった調査に際しては科学研究費を使用している。弁論大会の論集まで見せてくださったJ一家の皆さんの厚情と併せて、記して感謝したい。